

## 1 解表薬 ● 辛温解表薬

### 解表薬

解表とは、表邪を発散させて表証を取り除くことである。風寒、風熱、風湿、暑気などの外邪(外界の発病因子)が人体を侵したために発生した悪寒・発熱・頭痛、項部の強ばり、身体の疼痛、四肢がだるい、有汗あるいは無汗などの表証を除去するために用いる薬物を解表薬という。

幾つかの解表薬は、発汗解熱作用以外に、皮疹を透発(麻疹・水痘などの皮疹を十分に出しつくして治癒に導くこと)させる作用、鎮咳止嘔作用、疼痛を緩和する作用などを具えている。

解表薬は、薬物の性能と臨床的な効果によって、辛温解表薬と辛涼解表薬の2種類に分類される。

### 辛温解表薬

辛温解表薬は、悪寒、頭痛、発熱、身体痛、脈が浮緊(表実)から浮緩(表虚)などの寒証を伴う「表寒」に適應する薬である。

表寒とは、病邪に対する抵抗力の差によって二つに大別される。

- ①表実……激しい悪寒、無汗、脈浮緊の体の反応が強い状態。
- ②表虚……悪風、自汗、脈浮緩の体の反応が弱い状態。

個体や時間経過により、表実・表虚は様々な変化がみられる。

表寒では、体表血管の収縮、汗腺閉塞など熱の放散を抑制する反射がみられるため、体表血管を拡張して強い発汗作用をあらわす辛温解表薬(麻黄・肉桂・紫蘇・荊芥・防風など)を用いる。

## —麻黄(マオウ)—

マオウ科 マオウまたはその同属植物の地上茎を乾燥したもの。

## 薬 能

●発汗解表，鎮痛作用（散寒解表）

●利尿作用（利尿消腫）

●鎮咳作用，気管支拡張作用（宣肺平喘）

## 副作用

発汗過多  
動悸，不眠，尿閉  
胃腸障害

## ● 山本巖の薬能論

①——麻黄の作用と使用法……麻黄は非常に強い発汗作用をもち，特に風寒による咳や喘息に効果的である。その特徴的な効能により，感冒や風邪の症状，咳を鎮めるために使用される。麻黄根には止汗作用があり，自汗や盗汗の治療に用いられる。節にもまた止汗作用がある。よって，発汗させず麻黄の咳止め作用だけを用いるときは，麻黄根節は去らずに用いる。感冒のときの咳止めとして使用する三拗湯（麻黄・杏仁・甘草・生姜）は，麻黄と杏仁の組み合わせで咳を止め，桂枝を除いて発汗作用を抑えている。

②——表虚の症状に対する風邪処方……表虚状態とは，体力低下し免疫が弱っていて，寒くなるとすぐに風邪を引きやすい状態である。風邪を引いたり寒さに弱くなる場合，防風・白朮を含む玉屏風散（黄耆・防風・白朮・生姜）を用いる。小青竜湯，大青竜湯，麻杏甘石湯などは，風邪や喘息に対する処方として使われるが，これらの処方には麻黄が含まれ，脱汗を引き起こし，体が弱り動けなくなる場合がある。そんな際に，古方では表虚による喘息やアレルギー症状に対して桂枝加厚朴杏仁湯がよく用いられ，風

邪に対して非常に効果がある。一方、桂枝湯と玉屏風散の併用も、非常に良い場合がある。麻黄と黄耆は皮膚の水を除き、黄耆は主に下半身の水、発汗を止めて利尿する。麻黄は主に上半身の水を発汗させる。

**③——麻黄の効果的な組み合わせ……**麻黄は強い温性と発汗作用をもち、気管支の痙攣を除くため、咳や喘鳴・水腫に適用される。麻黄は喘息や痙攣性咳症状の咳き込み、止まりにくい咳に甘草を配合すると良い。また、中枢性鎮咳薬の杏仁・半夏とよく併用される。

寒による咳は、細辛や五味子、乾姜、紫蘇子、紫菀などと組み合わせ、方剤として小青竜湯・射干麻黄湯が、外寒風寒の咳嗽には、発汗解表、宣肺作用のある麻黄湯・三拗湯が有効である。反対に、熱による咳の炎症や充血、熱痰を伴う咳には石膏や桑白皮、黄芩など消炎作用の薬物を組み合わせ、麻杏甘石湯・定喘湯が有効である。

**④——麻黄と石膏の組み合わせ……**麻黄と石膏を組み合わせた処方、特に水腫や浮腫の治療に効果的である。麻黄は発汗を促進し、水分を排出させる効果があり、石膏はその利尿作用を強化する。越婢湯や越婢加朮湯は、この組み合わせを使用する代表的な処方で、風水や水腫の症状に対して有効である。また浮腫が主症状である場合、麻黄と石膏を用いた小青竜湯加杏仁石膏の処方がより効果がある。

麻黄はその強い発汗作用と利尿作用により、風寒による咳や喘息の治療に広く使用される。さらに、表虚による症状や浮腫の治療にも応用される。熱や寒を伴う咳には他の薬と合わせて使用する。麻黄と石膏を組み合わせた処方、特に水腫や浮腫に対して非常に効果的である。

#### 📖『東医雑録』関連頁

麻黄の発汗作用(1)-57, 麻黄の利尿作用(1)-106, 麻黄の鎮咳・気管支拡張作用(1)-185, 222～223

### ●『増補能毒』の薬能

麻黄の味は甘・辛、性は温。肺・心・大腸・膀胱経の四経に入る。

傷寒の頭痛や、汗を出し、寒邪が肺に入って咳嗽する者に用いる。

私云く、この薬は汗を出す第一の薬である。冬の正傷寒に用いて大変によく効く。この薬は正傷寒以外に用いることは少ない。尚口伝がある。

### 【毒】

本薬は腹中虚し、皮膚の衰えた人は甚だ嫌う。私云く、正傷寒でない限りは使わないのであれば、腹中虚や、皮膚が衰えた人に対する本薬の使用の可否について詮索はする必要はない。

但し、古方では冬でなくても使う。小続命湯に使っている。

### ● 運用の実際

●——**発汗解表作用**……風寒の邪による表寒に効果的であり、発汗を促進する。特に、桂枝と併用することで発汗力が強化されるため、発汗が不足している表実の状態には麻黄と桂枝を配合することが有効である。

【処方例】麻黄湯、葛根湯など。

●——**気管支拡張作用**……肺気の閉塞に伴う喘咳に使用する。気管支平滑筋の痙攣を緩和し、呼吸困難を改善する。喘息や咳の症状を和らげるため、麻黄は非常に重要な薬物である。

【処方例】麻杏甘石湯、小青竜湯など。

●——**利尿作用**……血管透過性亢進による浮腫や水腫、滲出物を軽減する効果がある。利尿作用を通じて、体内に溜まった余分な水分を排出し、むくみを改善する。浮腫に対しては、石膏との併用で作用が増す。

【処方例】越婢加朮湯、越婢湯、麻杏甘石湯、小青竜湯加杏仁石膏など。

### 臨床メモ

● 1887年長井長義博士は、漢薬の麻黄から有効成分エフェドリンを抽出することに成功し、後に大量合成が可能であることを証明した。これは、多くの喘息患者の苦痛を取り除くことになった。エフェドリンは、現在でも誘導体 dl-塩酸メチルエフェドリンという成分名で、気管支拡張剤として用いられている。当時の明治政府は新国家を建設中

で、日本医学界は漢方医学を捨て、西洋医学への移行を完了した時代だった。そんな時代に、西洋医学的な視点から漢薬の**麻黄**が見直された特筆すべき業績であった。

現在、**麻黄**の薬能から抗炎症作用・鎮咳作用・発汗作用などが用いられている。喘息、呼吸困難、咳嗽などに対して用いる場合、**杏仁・甘草・桂枝・細辛・五味子・石膏**などと組み合わせることが多い。

**麻黄** + **石膏**は滲出性炎症を改善し、**麻黄** + **杏仁**は鎮咳作用を強め、**麻黄** + **桂枝**は発汗作用を強める。

**麻黄**使用に際して、以下の副作用に注意する。①発汗過多、②動悸・不眠・尿閉、③胃腸障害、④高血圧症。

山本は、古い緑黄色の**麻黄**は副作用が出にくい、新しい青畳の様な**麻黄**は、副作用が出やすいので先に**麻黄**だけを煎じ、出てきた泡沫を除いて使用するよう指導した。

また止咳、平喘作用の増強、発汗解表作用の減弱のために以下の修治を行った。

#### 炙蜜麻黄

蜂蜜 100g を少量の水を入れて溶化させて、泡が出てきたときに**麻黄** 600g を加え攪拌し、ふやけさせ、とろ火で蜜が乾き、手につかなくなるまでかきまぜ、乾燥させて使用する。

\*

**麻黄**の成分はアドレナリン様作用の強いエフェドリン、抗炎症作用のプソイドエフェドリン作用がある。**炙蜜麻黄**はエフェドリンが少なくなり、副作用のある人や高齢者などには良い。副作用の対応策としては、**炙蜜麻黄**を用いるか**麻黄**を減量することで対応する。